



# 親鸞聖人750回大遠忌



「親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息」をいただいて

上山大峻（うえやま だいしゅん）

ご消息の冒頭で、ご門主さまは「このご勝縁しょうえんに、聖人のご苦勞をしのびたた、お徳を讃えるとともに、浄土真宗のみ教えを深く受けとめ、混迷の時代を導く灯火ともしびとして、広く伝わるように努めたいと思います」と、ご法要を迎えるにあたっての決意をしめされ、最後に「宗門の総合的な活動の新たな始まりとして、皆様の積極的なご協賛ご協力ご参加を心より期待いたします」と、私たち浄土真宗の流れをくむすべてのものが、この法要をかけたえのない勝機と受けとめ、宗門の再生に向けて心を新たに、念仏のみ教えが広く世界に伝わるよう呼びかけられました。

まず、ご門主さまは、今日の日本、いな世界の陥おちいっている「混迷」の現状を分析され厳しく批判されます。

仏教の説く縁起えんぎの道理が示すように、地球上のあらゆる生物非生物は密接つなに繋がりを持っています。ところが今日では、人間中心の考えがいよいよ強まり、一部の人の利益追求が極端なまでに拡大され、世界的な格差を生じ、人類のみならず、さまざまな生物の存続あやが危うくなっています。さらに、急激な社会の変化で、一人ひとりのいのちの根本が揺らいでいるように思われます。私たちは世の流れまどに惑わされ、自ら迷いの人生を送っていることを忘れがちではないでしょうか。

その現状にあって、私たち真宗者は何をめざすべきでしょうか。それについて、

如来の智慧ちえによって、争いの原因が人間の自己中心性にあることに気付かされ、心豊かに生きることのできる世の中、平和な世界を築くために貢献したいと思います。

と示され、私たち念仏者の向かうべき方向性を示されます。

人間が人間として平和に心豊かに生きることのできる社会こそ、私たちの願う社会であり、それはブツダや親鸞聖人のめざされたところでもあります。そのために私たちは現代において何をなすべきでしょうか。ご消息は、それを実現する道を、如来の智慧と慈悲に照らされ、争いの根源にひそむ自己中心性に気付き、それを反省しながら、いのちあるものが敬うやまい合い支えあって往生浄土の道を歩むところにあると明らかにされます。

この道こそ、親鸞聖人が顕あきらかにされ、私たちの先人が、苦勞のなかで護まもり、身をもって伝えてこられた念仏の大道です。その真実にゆるぎはありませんが、しかしながら今、いかにそれが不変の大道であっても、現状に甘んじるには、あまりにも激しい時代の変化にさらされています。対応を怠おこたるならば、宗門の伝道教団としての機能は劣化し、その使命を果たし得ないばかりか、宗勢の衰退は避けられません。それはとりもなおさず、い

しょうぼうぐずう  
ま最も求められている正法弘通の可能性が弱まることにほかなりません。そのことについて、ご門主さまは、次のように危機感をもたれています。

しかしながら、今日、宗門を概観しますと、布教や儀礼と生活との間に隔<sup>へだ</sup>たりが大きくなり、寺院の活動には門信徒が参加しにくく、また急激な人口の移動や世代の交替にも対応が困難になっています。

宗門を困難な状況にしている原因はいろいろ考えられますが、その一つは、浄土真宗のみ教えを受容する精神的土壌が、科学的思考の普遍化するなかで変化し、旧来の布教伝道法では人びとにみ教えが伝わりにくくなっていることです。また、法要・儀式がマンネリ化し、参加の人びとに感動を与えなくなり、参加者が減少して、従来の法要儀式の慣習が維持できなくなってきたことも無視できません。また、寺院が法要仏事の儀式執行者の役目にとどまり、地域社会での存在意義を失ってきたこと、家族制度の変化などにより、家庭内でも、前世代の習慣や行事の継承が難しくなり、宗教的行事の伝承が途切れだしたと、など旧来の伝道の体制が急速に劣化してきていることなどが指摘できましよう。

いま一つは、日本の産業構造の変化により、農村地域より都市部へ人口の移動が起こり、過疎過密の差が極端になって、伝道の行き渡らない地域が生じてきたことです。すなわち従来の農村中心の寺院配置の現状が、過疎の進行で運営が困難になり、同時に都市部では念仏の声の行き渡らない地域がますます拡大しつつあるという伝道体制のアンバランスが起きていることです。

このように宗門の伝道のあり方が、教学内容の点からも、組織の点からも困難な局面にあることを認識して、宗門は総力をあげて、十二年間にわたる振興計画を策定し、宗門の伝道力の回復を図ろうとしております。ご門主さまは、その計画について、次のように期待されます。

宗門では、このたびのご法要を機縁として、長期にわたる諸計画が立てられ、広く浄土真宗が伝わるよう取り組むことになっています。七百回大遠忌<sup>だいおんき</sup>に際して始められた門信徒会運動、重要な課題である同朋運動<sup>どうぼう</sup>の精神を受け継ぎ、現代社会<sup>こた</sup>に<sup>こた</sup>応える宗門を築きたいと思ひます。そのためには、人びとの悩みや思いを受けとめ共有する広い心<sup>やしな</sup>を養い、互いに支え合う組織を育て、み教えを伝えなければなりません。あわせて、時代に即応した組織機構の改革も必要であります。

宗門は、その衆知を集めて、門信徒の代表である宗会において十五にわたる重点項目を策定し、「新たなはじまり」のコンセプトのもと、宗門の再生をかけての大改革をめざすことになりました。それらはいずれも大切な事項ですが、社会の変化に宗門が対応するに最も重要で、しかも猶予できないことは、一つには、過疎過密の社会変化によって生じた伝道組織や体制の空白部分を補強していくこと、いま一つは、はじめて真宗の話を聞く若い人々にも分かり、納得できるようなお話ができるように、現代に対応した教学の整備を行なう必要があります。あわせてその教学をもって、次代の念仏者を再生産できる伝道の体制を確立しなければなりません。

なお、ご門主さまは、次のように述べられ、このたびの七百五十回大遠忌の法要が京都の本山においてのみでなく、全国の寺院においても勤修されることを期待されます。

それとともに、各寺各地で勤められる大遠忌法要を契機に、その地に適した寺院活動や門信徒の活動を、地域社会との交流を、そして、寺院活動の及ばない地域では、一層創意工夫をこらした活動を進めてくださるよう念願しております。

浄土真宗の寺院は、本願寺派だけでも全国でほぼ一万ヶ寺を擁しています。現在、人口の移動や集中化によって、必ずしも平均化はしていませんが、この既存の組織は、伝道においても、地域活動の拠点としても大きな組織力です。この度のご法要を機縁として、ご門徒のみならず地域の人々に親鸞聖人の教えに触れていただき、そ

の精神に生きる人の輪をいろいろの地域活動を通して、もっともっと広げていきたいものです。

宗門の歴史をかえりみますとき、私たちの先人はいつの時代にあっても、きびしい困難に対応しながら、み教えが人びとに伝わり、次代の念仏者を次々に育てていくことに努力を重ねてまいりました。私たちもまた、この念仏のみ教えを世界に、また子や孫に伝えるために、いまこそ奮起すべき時であります。

ご門主さまもまた、同じ思いをもって、

宗門の総合的な活動の新たな始まりとして、皆様の積極的なご協賛ご協力ご参加を心より期待いたします。

と、私たちに協力をよびかけられました。今こそ宗祖聖人のご恩に報いるため、その力を結集して宗門再生を実現し、ご門主さまの期待に応えていこうではありませんか。

(教学伝道研究センター所長)